
焔の錬金術師 これで一刀が役立たずになった！？

トラップ・クラップ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焰の錬金術師 これで一刀が役立たずになった！？

【Nコード】

N9385V

【作者名】

トラップ・クラブ

【あらすじ】

はい、初登校、おつと失礼初投稿にございます。

残すことは残すと思いますが、何分才能が欠片もない身ですので二、三話投稿しては新しいものを作っていくながら練習をしていこうと思います。

なにとぞ、なにとぞ温かく見守ってください。

では「焰の錬金術師」が真・恋姫無双の世界に行ったらどうなるか、作者は真・恋姫無双ほとんど知りませんが、改良に改良を重ねる

ねていきますのでよろしくお願いします。

ブログ—もしも—（前書き）

はい、初登校、おっと失礼初投稿にございます。

残すことは残すと思いますが、何分才能が欠片もない身ですので二、三話投稿しては新しいものを作っていくながら練習をしていこうと思います。

なにとぞ、なにとぞ温かく見守ってください。

では「焰の錬金術師」が真・恋姫無双の世界に行ったらどうなるか、作者は真・恋姫無双ほとんど知りませんが、改良に改良を重ねていきますのでよろしく願います。

ブローグ—もしも—

「うつ……、ここはどこだ……？」

真っ白い空間に二つの巨大な扉のようなものが浮いている。

確か自分はプライドに無理やり門を開かれたはずだ。だとするとここは……。

『そう、真理だよ。』

「誰だ貴様っ!？」

目の前に現れる真っ白い人型。こいつがエルリック兄弟が言っていたやつか？

『俺はお前達が世界と呼ぶ存在。あるいは宇宙。あるいは神。あるいは真理。あるいは全。あるいは一。そして俺はお前だ。』

「ほう、まさか私もお目にかかることになってしまつとはな。それで、何を持って行かれるのだ？私ほ。」

『ああ、それなただけだな、さっきの錬成は成功してしまった。』

「なっ!？それはどういうことだ？」

『お前のその後の存在が分解され、異世界、平行世界ですらないと

ところでその存在が再構築された。」

「おい、それは俺が帰れないということなのか？」

『まあそういうことになるな。あれはまじびつたぜ？人体錬成が成功したんだぜ？』

「エルリック兄弟の結論と違うではないか。どういうことだ。彼らは間違っていたのか？」

『いや、そうじゃない。実をいうと、やつらも成功しているぜ？ホムンクルスの腹の中から外へと自分を錬成しなおしている。』

「ああ、あれも成功ということもできるが……。」

『今回は異次元だ。成功率は極端に低い。よかったじゃねえか？代価はすでに払われているしな。プライドがいねえし、人柱も五人そろってないからこれで勝ったも同然だな。』

「それは……、よかった。」

『うん、向こうに行った後はいくらか記憶が飛ぶとは思うが、きつかけさえあれば戻んだろ。それと、錬金術は使えるから、じゃあな焰の錬金術師！！』

「アメストリスを、世界を、よろしく頼むぞ」

『なあにを言つてやがる！俺が世界だぜ？安心しろよ。』

「ふつ、それもそうだ。では、行ってくるよ、みんな。」

扉が開き、黒い手が体をからめ捕る。

『おおそつだ！相手の名前はゼツテエ聞いてから呼べよ？じゃあ、行つて来いよ。』

体が完全に飲み込まれると扉は閉まり、意識も完全に暗転していった……。

ブローグ—もしも—（後書き）

すっごい鋼の方の原作がぶっ壊れた気がしますね……。
なんかすいません。

そこは鋼のように強靱な心で乗り越えていきたいと思っている次第です。

第一話―まさかの黄巾を飛ばす！？（前書き）

はい、第一話の投稿です。

こんな駄文に評価をくださる人がいるとは世の中温かいものですね。

黄巾は虐殺になりそうだったので、飛ばしてしまいました。

董卓がここで勝って、歴史をぐるっと変えてみたいと思います。

これで一刀が役立たずになる？

いや……、一刀が鋼錬を知っていたら……。

第一話―まさかの黄巾を飛ばす！？

管輅曰く、

「この戦乱の世を鎮める為天より平和の使者が流星と共に現れる」
と――

〔side董卓軍〕

「ふうん、そんな噂がながれてるんだ。その人が現れたら私たちも手伝ってあげなきゃね！」

「ええ、でも占ったのはあの管輅だとか何とか……。」

「あ、それ絶対あたへんやんか」

「まあそんな人がいなくなつて、私たちが平和にすればいいんだよね？」

「ボクたちがついてるんだから大丈夫だよ！」

「……恋、頑張る。」

「ねえ、あのお兄さんどうしたのかな？」

「ん？道に迷つてんとちゃうか？」

「御笑談のところ申し訳ないのだが、ここら一帯のことを詳しくお聞かせ願えないだろうか？遠くの国から来たものでね……。」

〈side 焰の錬金術師〉

なぜか町の路地裏から出てくることになったのだが、それはまあいい。とにかく話を聞かせてもらおう

情報は大切なものだからな。あの御嬢さん方に聞いてみよう。

「御笑談のところ申し訳ないのだが、ここら一帯のことを詳しくお聞かせ願えないだろうか？遠くの国から来たものでね……。」

『おつ、兄ちゃんだからそんないかした服着てんのか。まあええよ、詠、話たれ。』

一応は軍服だがな。御嬢さん方の服もなかなか奇抜なものだよ。鋼のセンスに並んでいるだろう。

『あんたは話さないのね……。異国からなんて珍しい。ここの国は月、つまりこの董卓【様】の治める……』

〈三国志黄巾党の乱終了までを説明中〉

「なるほど、大体は分かった。つまり私はこの国の領主様御一行に声をかけたわけだ。申し訳ないな。」

『いや、構わないよ。それよりお兄さん、お金とか持ってるの？』

「ははは、残念なことになにも持っていないよ……。」

屋台の通貨も見たことがなかったからな。あ、鋼に貸した金返して

もらってないな。

『異国のお兄さんだしな、ずいぶん腕が立つとみたで！しばらくうちらんとこに泊まっていったらどうや？』

こちらは先ほど死にかけたばかりだぞ！いや、怪我はなぜか治っているな。

まだ死にたくはないからな。燃やすわけにもいくまい。

「勝負は絶対しないぞ！腰の武器に手がかかってるやつとやり合ったら死んでしまうぞ！？（だれがとはいわないが）私は手袋で戦うのだ！それに私の専門は殲滅だぞ！？」

『武器が手袋で殲滅が得意ってどうゆう意味や……。』

む？誰か走ってきたが。

『すつすみませんっ！！賈馱殿！つい先日反董卓連合が結成、こちらに向かってきております！！』

『なんやと！？月がなにしたっていうんや！？』

『それが、董卓が悪政をしているからということのようなのです……。』

急な展開だな。悪政か……。

『わかったよ、敵の数はどのくらいなの？』

『二十万以上が集まり、十五以上の群雄たちが参加していると思われます。』

なかなか多い、が。この世界には錬成の跡がいくら探しても見つからない。おそらくは珍しいか存在しないのだろう。ならば、

『うう、とつとにかく軍議を始めるよ！』

「ふむ、追いつけばよいのだろうか？ならば私の専門に近いな。二十万なら私がなんとかできるかもしれないぞ」

『はあ！？あなた自分が何言ってるかわかってるの？』

「もちろんだ、私はアメストリス国軍大佐、ロイ・マスタング。またの名は焰の錬金術師だ！」

『錬金術師って……。お兄さん頭大丈夫ですか？』

「パチン！ゴオウツ」

指を鳴らし彼女たちの間を縫うように焰を走らせる。

『……………。』

『んなアホなことあるか？』

『まっまさかの本物ですか…………。』

『ほんとにいたんだ。』

『…………焰の錬金術師。』

「まかせておけ、軽く炙れば逃げるだろう。いざとなったら城壁でも錬成すればいいだろう。かわりにしばらくの間衣食住を保障してくれないかな？」

『むしろ客将になつてほしいんだけど……』

『……この人礼儀正しい。みんなも逃げない。いい人。』

さつきからくつついてくる動物は彼女の手先か。

「ははは、非常にありがたい話だな、それは。それで、私が働くのはいつになるのかな？」

『それが、明日の朝には到着しそうな距離です。しかし、まだ総大将が決まっていないうので、突撃は明日の昼になるかと……』

『それが漏れているのはおとりかな？』

『いえ、袁紹軍から漏れた情報ですので、信頼してよろしいかと。』

『そうね……。一応準備は朝までに済ませておきましょう。配置は……』

袁紹軍とやらもまあ随分と信頼されているな。

「最初にあたるのは私だけでいいかな？あとは自由に決めてくれて構わないぞ、私は。」

『わかったよ、お兄さんは虎牢関で最初ですね。恋が言っなら信頼もできるでしょう。では明日まで休んでいてもらいましょう。明日働いてもらうわけですからね。そのあなた、彼を兵舎へ。部屋の用意と自己紹介は明日するから、休んでいてください。』

「わかった……。ではまた明日。」

『では案内いたしますので。こちらへ。』

ついてくる動物はどうすればいいんだろうか。

ふむ、兵舎もなかなか綺麗だな。間違いなく善政に見えるのだが……。

それにしてもなぜ女性しかないのだろうか？

考えても無駄か。今日は眠っておこう。鋼の、うまくやるんだぞ……。

中尉は、どうしているだろう？

ん？中尉とはだれのことだ？

第一話―まさかの黄巾を飛ばす！？（後書き）

はい、改訂しました。

中尉の記憶が飛んでしまったもようです。

第二話 その頃のハガレン（前書き）

一方その頃エドワードたちは……。

いや、中尉は……。

第二話 その頃のハガレン

Stageハガレン

『ふむ、四人か。アルフォンス・エルリックは直に目が覚めるだろう。しかし、ロイ・マスタングが来ていないな。失敗はないはずだがな。』

「おい！それはどういうことだ？アルの目が覚めるのは呼び出されただけだから、でいいのか？それに、大佐に何をしたんだお前。」

『なに、強制的に真理を開かせただけだよ。しかし、本人を錬成しなおす陣を用いているからな。存在はしているはずだぞ？』

「強制的にだと……。でもこれで人柱は五人集まらないはずだ。どうするんだよ。」

『問題ない、もう一人作ればいい。そうだな、ふむ、術師ではないがリザ・ホークアイが一番適性がありそうだな。しかし誰かを付けねばならんな。』

「なっ！なんで中尉なんだよ！」

『おおそうだな、エドワード・エルリック、お前なら、腕一本程度で帰ってこれるだろう？』

ニユルツ、ズドンー！

『うつ、くつ、ここは……。』

「中尉！！大丈夫か！？」

『ああ、君の大事な大事なロイ・マスタングが帰ってこないからね、君に代わりをやってもらうんだよ。』

『えっ！大佐が！？そんな、大佐が……。』

シュツツツ！

『ぐっ！あっ！』

「てめえ！中尉をどうするつもりだ！？」

『もちろん真理を見てもらっただよ。安心したまえ、君も一緒だ。』

シュツツツ

「がっ！はっ！」

『エドワード！ホークアイ中尉！』

『では、行ってくるといい。これで五人そろっ！！』

「『うわあああああ！！』」

｝ s t a g e 真理 ｝

『錬金術を学ばざる者よ。 ようこそ真理へ！！』

「貴方は誰かしら？随分おもしろい姿だけど。」

『無視かい。 うゝん、俺はお前達が世界と呼ぶ存在。あるいは宇宙。あるいは神。あるいは真理。あるいは全。あるいは一。そして俺はお前、じゃなくてエドワード・エルリックだ。』

「私ではないのは私が錬金術師ではないからかしら？」

『まっ、そーいうことだ。俺は錬金術における真理だからな。』

「それで、私は代価とやらは払うのかしら？」

『いや、代価ならさつきエドワード・エルリックが右腕のオートメイルとホムンクルスの賢者の石少々で支払っていった。ちなみに、錬成がされたのはお前だけだからあいつは帰って行ったよ。』

「私は帰れないみたいな言い方ね。」

『そうだな、違う世界に錬成しなおされているが、まあよかったんじゃないか？』

「なにがかしら？」

『むこうにはロイ・マスタングも飛ばされている。』

「大佐が！？大佐は生きていますね！？」

『ああ、綺麗なお嬢さん方に囲まれて元気元気だぜ？』

「……大佐。」

『おお、剣呑剣呑。しかしだなあ、あいつはお前を……、いや、ここまで俺が手えだすのもあれか。』

「大佐がどうかしたんでしょうか？」

『いや、今回は別に起こらないはずだ。代価が充分だからな。』

「大佐に何かあったんですね。早く、送ってもらえないでしょうか。」

「

『ああ、いいけどよ……。そうだそうだ、相手の名前は質問してから呼ぶこと。いいな?』

「ええわかりました。では、」

『わかった、じゃあな。やっぱ一つだけ言っとくわ。強いショックがあれば元に戻るだろう。この意味は直分かるだろう。じゃあ頑張れよ。』

「ありがとうございます。この国をみなさんをよろしく願います。」

がんっ!!

扉は開き、彼女の体を無数の黒い手の中へ中へと引きずり込む。

彼女はその手を振り払い、自分自ら扉の中へと身を投じた。

自分の思う人がまた、自分を思ってくれていると信じて……。

真理の眼は何も言わず、ただ、人々を眺めるのみ。

第二話 その頃のハガレン（後書き）

少し短いですね、すみません。

携帯談話さん、ご感想ありがとうございます。

次回、中尉が驚愕！！

大佐「目が、目があああああ！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9385v/>

焔の錬金術師 これで一刀が役立たずになった！？

2011年10月9日15時00分発行